

地域の名物を PR！小学5年生が企画したアプリ「そうりのうめ」

ーキャリア教育の一環である起業体験推進事業の取組を通してー

知多市立佐布里小学校 教諭 荒尾 敏雄

キーワード：起業体験推進事業，会社 SURUM，梅，企画書，アプリ，地域貢献

実践の概要

平成28年度、本校は文部科学省より起業体験推進事業の研究委託を受け、「起業家精神」や「起業家的資質・能力」を有する人材を育成することを目標として、5年生の会社 SURUM を設立した。そして、地域に貢献することを目的として外部関連企業・団体のご協力を得ながら、商品（梅に関するアプリなど）を開発した。

1. 本実践のねらい

本校周辺には愛知用水の調整池である佐布里池があり、そこには約5100本の梅の木が植えられている。特に佐布里梅は、地元の農家が明治時代に生み出した地域特産の品種である。毎年6月初旬、本校では親子でその梅の実を収穫する「梅ちぎり」という活動があり、40年以上続く伝統的な学校行事となっている。そこで、梅を商品化する学習計画を立て、次期学習指導要領を参照しつつ、育てたい起業家的資質・能力を次のように考えた。

「知識・技能」においては、仕事に対する知識を得、働くことへの意義を理解する。「思考力・判断力・表現力等」では、仲間と考えを伝え合い、自分の考えを深めて表現することができる力を育成する。また、自分の住む地域、学校のよさを再認識する。「学びに向かう力・人間性等」では、自分が社会の中で役に立っているという自己有用感を得、自分の役割を果たしつつ、仲間と協働して社会に参画し、地域に貢献しようとする態度を育成する。

2. 実践内容

2.1 会社の設立と組織作り

知多市役所商工振興課より、「梅まつりの来場者を増やすために商品を開発してほしいという依頼を受け、商品を開発する」という学習計画を立案した。そこでまず商工振興課の方に出前講座をお願いし、児童にミッションとして伝えてもらった。児童はそれを受け、どのような

商品を開発するか話し合った。その結果、佐布里池梅林の梅を紹介するパンフレットやデジタルパンフレット、アプリ

を商品化することに決まった。「佐布里梅」をローマ字で「So・U・Ri・U・Me」と表記し、ローマ字の頭文字の一部を取って会社名とした。次に、地元ケーブルテレビ会社の社長をお招きして出前講座を開催し、会社とは何か、その目的、仕事の内容、会社組織について話していただいた。その後、児童は自分たちが設立した会社の組織を作った。

2.2 商品の企画と開発

本実践では、知多半島の情報雑誌を手がける出版社の代表取締役、知多半島の観光に関する Web ページを制作している代表取締役、システムエンジニア、さらには知多市長を外部講師としてお招きして、仕事とは何か、リーダーとは何かなどについて出前講座を開催した。児童はシステムエンジニアの方から教えていただいた外部設計図を使って、アプリの内容や機能について考えた。アプリには、「梅の説明」「梅の歴史」「梅のレシピ」などの

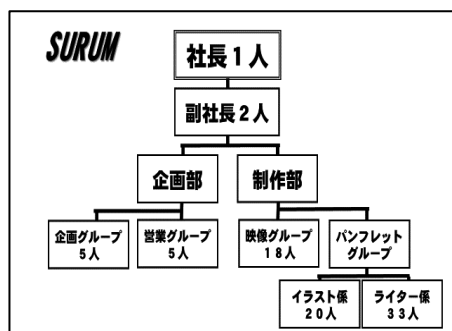


図1 5年生の会社組織図

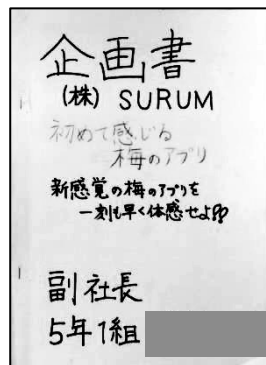


図2 児童の企画書

【本単元の学習内容】	単元の学習活動	児童の活動
●指導目標／地域、学校、自己に誇りをもち、起業家的資質・能力を有する佐布里つ子を育成する。	1 学習課題の設定 ①地域、学校の特色を考える ②商品開発に向けたミッション	地域、学校の特色である梅を学習材として、商品開発をすることを決定する。
●評価方法／アンケートの実施（事前、中間、事後）、ポートフォリオ評価、ルーブリック評価。	2 会社の設立と組織作り ①会社を設立する ②会社組織を作る ③リーダーとして大切なこと	会社名を SURUM とし、社長1名、副社長2名、企画部、制作部という会社組織を作る。
【指導略案】	3 商品の企画と開発 ①アプリの開発 ②企画書の作成 ③企画書のプレゼンテーション	外部講師による出前授業を設け、アドバイスをいただいで、部署ごとに分かれて商品を開発する。外部講師の方々をお招きして、プレゼンを行う。
●単元指導計画（全体時間50時間） (1)学習課題の設定（2時間） (2)会社の設立と組織作り（4時間） (3)商品の企画と開発（36時間） (4)商品の販売と活用（6時間） (5)活動の振り返り（2時間）	4 商品の販売と活用 ①梅まつりに参加する ②収益の使途を考える	梅まつりに2回参加して、来場者の方に商品を販売したり、紹介したりする。
●本単元の展開 平成28年4月～平成29年3月 児童数84名 外部関連企業・団体として、地元ケーブルテレビ会社、知多半島の情報雑誌出版社、知多半島の観光 Web 会社、システムエンジニア、知多市役所商工振興課、商工会議所、知多市長に協力を依頼した。なお、本実践で実施した出前講座、アプリ開発にかかる費用については、文部科学省からの研究費に拠るものである。	5 活動の振り返り	一年間の活動を振り返り、目標に対する自己評価を行う。

内容載せることにした。梅のレシピの中には、一部動画コンテンツを組み入れた。「梅の説明」は中国語・英語でも表示できるように多言語機能をもたせることにした。中国語への翻訳は児童の保護者に依頼し、英語への翻訳は本校のALTに依頼した。さらに地元ケーブルテレビ会社に依頼して、児童の声を録音してもらい、音声案内機能も備えることにした。

企画書を書き終えた後、この企画は面白いということを読み手に伝えるために、企画書のキャッチコピーを考えた。こうして、11月に企画書が完成し、約2か月してアプリが完成した。アプリはiOS版、アンドロイド版共に「そうりのうめ」と検索すると無料でダウンロード



写真1 そうりのうめアプリ

ロードできるようにした。パンフレットは500部作成し、デジタルパンフレットは、学校ホームページに組み入れ、だれでもアクセスして見るができるようにした。



図3 iOS用QR

2.3 完成した商品の活用

佐布里池梅まつりに、5年生全員が参加して商品をPRした。梅まつりの会場でブースを設け、商品のパンフレットを販売した。また、それぞれの持ち場を決め、タブレットPC端末を持って来場者にアプリの紹介もした。会場には、QRコードが掲示された看板を設置し、アプリをダウンロードした後にそれを読み取ると、梅の説明が瞬時に分かるようになっている。アプリのダウンロード数は梅まつり期間中に625件に上り、来場者数は昨年と比べて3万2千人増え、17万3千人であった。



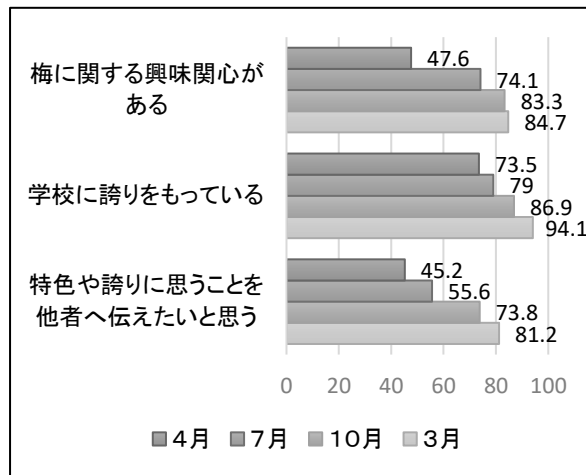
写真2 梅まつり会場でアプリを使って梅を紹介

3. 成果

4月当初、児童の梅に関する興味・関心は低かったが、3月のアンケートの結果を見ると37.1%増加している。自分の学校に誇りをもっているという回答も、20.6%増加している。地域、学校の特徴である梅について

他者に伝えたいと思う児童は36%増加した。児童は起業体験を通して、特に地域に貢献する活動を通して、自分の住んでいる地域をPRすればするほど地域や学校に対して誇りをもつようになった。また、会社の一員として価値ある商品を販売した自分自身のことも、誇らしく感じるようになった。

表1 事前・中間・事後アンケートの比較



児童は社会には様々な仕事があることを理解し、講師の方々が熱意をもって仕事に取り組んでいる姿に啓発されて、よい会社をつくろう、よりよい商品をつくろうという意欲が芽生えてきた。そして自分たちが熱心に仕事に取り組むことで、仕事に対する意識が少しずつ変わっていった。外部関連企業・団体と連携して商品を開発する中で、児童の仕事に対する意識が変容し、起業や就業への意識が高まったと考える。

会社組織を作ったことにより、児童は普段の仲間との関係性とは違った仲間づくりができた。目標を共有して仕事をする中で、児童は積極的にコミュニケーションを図るようになった。そして、「思いやり」をもって自分の考えや意見を伝え仲間と語り合うことで、よりよい考えになることを学び、協働することの大切さを知った。社員一丸となって目標を達成し、地域に貢献したことを他者（外部講師、来場者、保護者、他学年など）から承認してもらうことによって、児童は社会・地域の中で自分が役に立っているという自己有用感を感じるようになった。梅まつりに参加して商品を販売、活用する場を設けることは、社会に参画する力を身に付けるだけでなく自己有用感を高める上でも有効な手だてであったと考える。

4. 今後に向けて

起業体験推進事業の研究委託は平成28年度のみであるが、児童は今年も梅まつりに参加してアプリを活用し、地域に貢献する活動を行う。「そうりのうめ」アプリにブッシュ機能を新たに追加したので、梅まつりの情報などを積極的に配信していく予定である。また、平成29年度は5年生が新商品を開発しており、今後も本校のカリキュラムに起業体験の活動を位置付けて、郷土に対する愛着をもち地域に貢献する児童を育てていきたい。